

施行例はI期2例, III<sub>A</sub>期4例, III<sub>B</sub>期1例であり, 生存例はIII<sub>A</sub>期の3例で相対治癒切除以上施行例であり23~31ヵ月健存しDFIは22~24ヵ月であった。手術非施行例では生存例は認められなかった。III<sub>A</sub>期でも相対治癒切除術以上が可能な場合CTやRAD合併療法で比較的長期のDFIが期待されると思われた。

#### 54. Cushing症候群を呈した小細胞肺癌の1例

九州大胸部疾患研究施設

川崎雅之, 中野寛行  
松本幸一郎, 松木裕暁  
八並 淳, 橋本修一, 中西洋一  
相沢久道, 原 信之  
症例は70歳, 女性。咳嗽, 体重増加, 満月様顔貌を主訴に入院。TBBにて小細胞肺癌の診断が得られたが, 精査中に多毛, 脱力, 色素沈着が出現した。検査成績では, 低K血症, 高血糖, 血中ACTHの上昇, 日内変動のないコーチゾールの上昇がみられた。TBB標本の免疫組織染色と培養細胞上清のIRMAにて, 腫瘍細胞による異所性ACTH産生が証明された。化学療法による反応は良好で, 治療経過に伴って, ACTH, コーチゾールは正常化した。

#### 55. 末梢血幹細胞移植を補助療法として超大量化学療法を施行した小細胞肺癌の1治療経験

九州大胸部疾患研究施設

越智博文, 田中拓夫, 松木裕暁  
川崎雅之, 八並 淳, 橋本修一  
中西洋一, 相沢久道, 原 信之  
症例は53歳, 男性。咳嗽, 嗄声, 顔面・頸部腫脹を主訴に1993年11月当科入院。III<sub>B</sub>期小細胞肺癌と診断。conventional chemotherapyを2クール施行し, good PRを確認した上で,

末梢血幹細胞移植併用下, 大量化学療法を施行した。grade 4の骨髓機能低下と, grade 2の発熱以外, 重篤な合併症もなく安全に施行することができた。

#### 56. 化学療法に耐性を示した肺小細胞癌の解析

長崎大第2内科 岡三喜男

檜崎史彦, 渡辺正実, 原 耕平  
国療南福岡病院内科 福田正明

手術前に化学療法単独および放射線併用療法を行った肺小細胞癌3例について, 薬剤耐性因子を検討した。全例にCDDPとVP16が投与され, 臨床効果判定はPRとNCであった。解析は, 多剤耐性癌細胞株を対照として, 腫瘍部と正常部について, 遺伝子と蛋白レベルで比較した。その結果, MDR1およびPGP, またはMRPの高い発現がみられ, GST-piは陰性であった。肺小細胞癌の薬剤耐性には, MDR1とMRP耐性遺伝子の関与が考えられる。

#### 57. 原発性肺小細胞癌血中CEA陽性例の臨床病理学的検討

熊本地域医療センター呼吸器科

瀬戸貴司, 千場 博, 深井祐治

松木美才, 瀬戸真由美  
同 病理 蔵野良一

原発性肺小細胞癌(SCLC)と診断, 抗癌化学療法(CT CBDCA VP-16)が4クール施行された50例中, CEA陽性31例のCT成績を中心に検討した。CEA値は病期進行に相関せず, CEA高値例はCT奏効率が低い傾向にあった。また, CT効果に関わらず生存期間が長い症例が認められた。CEA陽性例に好酸性核小体の出現率が高かった。以上よりCEA高値例には本来SCLCからは区別すべき細胞群が含まれている可能性が示唆さ

れた。

#### 58. 肺偽リンパ腫の1例

熊本中央病院呼吸器科, 病理研究科 岡本 勇, 藤野 昇

早坂真一, 吉永 健, 木山程荘

大塚陽一郎, 絹脇悦生

症例は60歳男性。検診の胸部レントゲンにて結節影を指摘され経気管支鏡的生検にて, 偽リンパ腫が疑われた。右上葉切除術施行し切除標本の免疫組織化学的検索にて増殖しているリンパ球のPolyclonalityを証明し偽リンパ腫と確認した。

#### 59. 気管脂肪腫の1切除例

国病九州がんセンター呼吸器部

田山光介, 高井英二, 上田剛資

高梨伸子, 横山秀樹

矢野篤次郎, 麻生博史

一瀬幸人

胸部CTにて偶然発見され診断困難であった気管脂肪腫を経験したので報告する。症例は60歳, 女性で胸写異常影の精査中, 胸部CTで気管分岐部直上に小結節を認め入院。内視鏡的には表面平滑な腫瘤で, 右主気管支を90%閉塞していた。回数の生検, 穿刺で診断が得られなかったため根治手術を行った。気管下部右側の腫瘤を切除し, 術中迅速病理診断で脂肪腫と診断された。術後経過良好で再発の兆候無く現在社会復帰している。

#### 60. 胸壁に発生したCastleman病

長崎大第2内科

中野令伊司, 高谷 洋

早田 宏, 岡三喜男, 原 耕平

症例は40歳, 男性。症状はなく, 胸部レントゲンで右下肺背側に6×7cmの異常影を指摘され入院。腫瘤は, 胸膜外サインを伴い, CTでは造影効果がみられ, MRIではT1低信号, T2高信号を呈した。手術では腫瘤は

胸壁内に存在し、病理学的には Castleman病のhyaline-vascular型と診断した。今症例は胸壁に発生しており、過去の症例報告でも稀な部位であり報告した。

#### 61. 原発性クリプトコックス症の1例

鹿児島大放射線科 野口一成  
向井浩文, 中條政敬, 森山高明  
県立鹿屋病院 島田受理夫  
国立南九州病院 廣津泰寛  
脇本讓二

悪性腫瘍を否定できない為胸開肺生検を施行し、原発性肺クリプトコックス症と診断した一例を経験したので報告した。症例は41歳の男性で、平成5年7月の検診で胸部異常陰影を指摘され、7月19日に県立鹿屋病院を受診した。胸部CT上、右S<sup>6</sup>に比較的境界明瞭で胸膜陥入像と末梢性の脈管集束を伴う径1.5cmの結節影を認めた。PAS, グロコット, アルシヤンプルー染色で菌体成分を認め原発性肺クリプトコックス症と診断した。

#### 62. 気管支粘表皮癌の1例

北九州市医療センター呼吸器外科 井上 隆

症例は17歳女性、咳嗽・喀痰を主訴に受診。胸写上左下葉の無気肺が、気管支鏡では左主気管支にポリープ状腫瘤が認められた。術中病理検査にて粘表皮癌と診断され左下葉スリープ切除術を施行した。現在術後13ヵ月であるが再発なく生存中である。自験例を加えた本邦報告例計59例を検討した。その臨床的特徴は若年者・中枢側発生・有症状例が多く高悪性度症例が約1/4に存在した。手術は気管・気管支形成術の適応となる症例が多くみられた。

#### 63. 慢性結核性膿胸に対する胸郭形成術後に発生した胸膜

悪性リンパ腫の1剖検例  
産業医大第1病理 笠井孝彦  
藤野雅世, 橋本 洋  
同 第1内科 吉積宏治  
江藤澄哉

38年前に右結核性膿胸に対して胸郭形成術が施行された67歳男性の胸膜に発生した悪性リンパ腫の腫瘍細胞に、EB virusの感染がIn situ hybridization法により確認できた剖検例を経験したので報告する。免疫組織化学的にはリンパ腫細胞はL26, MB-1, UCHL-1には陰性であったが、MT-1陽性であり、T cell由来の可能性が考えられた。

#### 64. 縦隔germ cell tumorの1例

大分医大第2内科 宮崎幸彦  
seminoma, choriocarcinoma, yolk sac tumor, teratomaの成分が混在した縦隔mixed germ cell tumorの1例を経験した。症例は21歳、男性。右前胸部痛にて来院。胸部レ線にて右縦隔腫瘍を認め、経皮針生検にてseminomaと診断されたが、AFP, HCG, HCG-βが高値であり、その他の腫瘍成分の混在が示唆された。抗癌剤、放射線療法にて腫瘍内部に広範な壊死を認めたが、腫瘍径は縮小せず、腫瘍摘出術施行。摘出標本の大部分はteratomaであった。

#### 65. 限局性胸膜中皮腫の3例

大分市立医師会アルメイダ病院 胸部外科 一万田充俊  
李 泰成  
同 呼吸器科 三重野龍彦  
岸 健志

3例の限局性胸膜中皮腫を報告した。1例は胸壁に浸潤した悪性で腫瘍内にアスベスト体が見られた。1例は肺内へ埋没するように発育し、他の1例は臓側胸膜から有茎性に発育してい

た。悪性限局性の胸膜中皮腫は珍しいので報告した。

#### 66. 限局性胸膜中皮腫5例の臨床的検討

国療沖縄病院外科 野里栄治  
河崎英範, 友利寛文, 川畑 勉  
大田守雄, 国吉真行, 山内和雄  
石川清司, 源河圭一郎

限局性胸膜中皮腫5例について、その臨床像を検討したので報告する。5例の内訳は悪性2例、良性3例で男性3例、女性2例、年齢35~73歳であった。発見動機は悪性の1例を除き検診発見で、全例発見時に胸水の貯留はなく術前検査から胸膜中皮腫の確診が得られたものはなかった。悪性2例は4年以内に死亡し予後不良であったが、良性3例は肺部分切除術、胸腔鏡下手術が施行され再発なく経過良好である。

#### 67. 化学療法後に胸膜肺全摘術を施行した播種性胸腺腫

鹿児島大第1外科 崎田浩徳  
下高原哲朗, 豊山博信  
小山洋樹, 柳 正和, 松本英彦  
西島浩雄, 愛甲 孝  
同 第3内科 川畑政治  
納 光弘

術前化学療法後に摘出術を施行した播種性浸潤型胸腺腫の1例を経験したので報告する。

症例は39歳、女性。眼瞼下垂、複視を主訴として来院。重症筋無力症および播種性胸腺腫の診断。術前治療としてCAVUPを10Course実施した結果、PRの効果が得られた。1992年6月開胸、胸膜肺全摘術、拡大胸腺摘出術、鎖骨上窩リンパ節郭清を施行した。正岡の分類ではIVb期であった。術後24ヵ月経過した現在、再発なく外来通院中である。

#### 68. 悪性胸膜中皮腫の検討